

演劇的体験した大学生のカナダのストーリードラマ論的考察

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
北村 寛

現代は、競争社会である。子どもたちは幼少期から物質主義的、科学主義的な価値観の影響を受けた教育を享受し、子どもの個性を豊かに育み、自由な想像力を発揮し、創造力を伸ばす場が少ない。競争社会、画一的、知識教育が主流な時代において、子どもの感情や感性は十分に育てられることなく抑圧され続けているように思われる。このような環境下で様々な矛盾を感じた子どもたちは人間性を喪失していくのではないだろうか。子どもたちの危機的現象（いじめ、不登校、ひきこもり、学級崩壊、学力低下など）が昨今の教育問題と叫ばれているが、有効な対応が難しいのが現実にある。

子どもたちの危機的現象を、学校教育にのみ還元することはできないと理解した上で、カナダのドラマ教育の D・ブース (David Booth) の提唱するストーリードラマ論にみられるような、人間が人間として自己の存在の意味を見出し、自己理解、他者理解、人間理解と深めながら自己成長を助ける想像力や創造力の育成への十分な配慮がなされなかったことを指摘したい。

本研究では、大学時代に演劇的活動に参加した大学生が、大学を卒業して自己の演劇的体験をどのように自己省察するのか、演劇的体験を通して何に気づき、何を獲得したのかに焦点を当て、演劇的体験の意味を明らかにすることにある。演劇的体験をした大学生のインタビュー結果と筆者が演劇的活動の最初から最終本番まで関与観察したフィールドノーツを基にしたデータを、カナダのストーリードラマ論を用いて試験的にエピソード記述を試み、ドラマ教育的手法を使って考察する。

カナダの D・ブースの提唱するストーリードラマ論は、物語を安全な出発点として、物語の役柄を通して物語のなかに分け入り、物語の世界と現実の世界の両方での体験の間を結びつけて新たな意味を見いだす学びの機会である。この体験を通じて子どもたちは、物語を理解し共感するだけでなく、新しいものの見方を獲得しものの見方を広げ、共感力、自己表現力、コミュニケーション力を養う。さらに言えば、物語の空想世界で自由に想像力を働かせ、創造的な思考の基で自己の人生を創造的に営み、自主創造の姿勢を持った人間を育てるものである。創造性とは、自己が現実を越えて新たな自己を想像するところから始まり、それを自己表現することである。

演劇的体験をした大学生が、この体験を通じて何に気づき、何を獲得したのが明らかにしていくとともに、現代の教育において十分な配慮がなされていない創造力育成を補完するカナダの D・ブースの提唱するストーリードラマ論の教育的可能性を考究していきたい。